Trajectory

東大漕艇部には男子部と女子部があり、
その選手は大きく分けて、「漕手(Rower)」と「舵手(Coxwain)」に分かれる。
それぞれの入部からの生活を、二人の選手に注目して追ってみよう。

漕手
高久留米附設高校出身
野田 真聖

舵手
盛岡第三高校出身
堀江 森

駒トレ期。4つ上の先輩が付きっ切りでフォームを一から指導してくださる。COXも漕ぎの基本を学ぶため、一緒にトレーニングする。

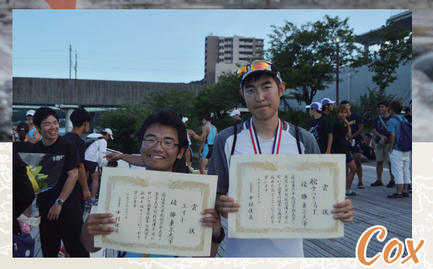
同期での集合写真。
東大漕艇部では、立場に隔てなく同期の結束がある。その理由の一つには夏の「浅野杯合宿」で男女も、漕手COXマネージャーも混合のクルーを組むことがあげられるだろう。どうしたら船が速くなるのかを自分たちで考え、悩みながら進む中で、お互いのことを理解していく。
浅野杯合宿入りを境に、少しずつコーチの手元を離れていく。

1年の冬場は一つの大きな山場。厳しい雨風の中漕ぎこむことで、心身共に激しく鍛えられていく。
漕手のメンタルも落ち着かず沈みがちな中、堀江もうまく接せない自分を責め、ふさぎ込むこともあった。

ひょうきんな言動とは裏腹に、その躯体が絞り出す力は、カーボンの堅いオールをもしならせる。ストレングスコーチが課す鬼メニューにも苦笑いで応え、淡々とこなすストイックなアスリートへと成長した。
野田は漕艇部の人々と触れる中で、元来のやさしさに加えて責任感が芽生え、陽気にみんなを引っ張っている。クルーのリーダーを担い、ミーティングを自らが軸となって進めていくようになった。

後期課程では教育学を専攻する堀江。実は嫌々入った東大だったが、専攻分野の強みを活かして、クルーを動かしていく。マネージャーも含めたクルーのミーティングを主導し、漕手でもマネージャーでもない立場からRowingに切り込んでいく。
クルーの中では唯一前を向いている舵手。漕手は先行するクルーが見えないため、戦況を読む頭脳戦。ここぞというタイミングでスパートを入れ、相手を引き離していく様は圧巻。
自分の好きなことと、高みへ向かう手段を一致させたことが、堀江をここまで連れてきた。

2年生の秋ごろから先輩としての自覚が芽生え始めた野田。今まで自分の目の前や同期のことだけに集中していたのが、下級生を通して様々なことを見つめるようになった。



冬場を乗り越えコールが一段とうまくなった堀江は、2年の夏、京大との一騎打ちに向け、漕手のフィードバックを意識して得るようにし、操舵にも磨きをかけた。遠征で慣れないコースをミスなく漕破し、圧倒的大差で勝利した。